

## テキスト

拙者親方と申すは、お立会いのうちにご存知のおかたもござりましょうが、  
お江戸を発って二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、  
青物町へ登りお出でなされるれば、欄干橋虎屋藤右衛門ただ今は剃髪いたして  
円齊と名乗ります。

元朝より大晦日まで、お手に入れます此の薬は、むかし陳の国の唐人、外郎という人、  
わが朝へ来たり。帝へ参内の折から、此の薬を深く籠めおき、  
用ゆるときは一粒ずつ、冠の隙間より取り出だす。

よって、その名を帝より「とうちんこう」と賜る。

すなわち、文字には「頂き、透く、香い」と書いて、「とうちんこう」と申す。

ただ今は此の薬、殊の外世上に広まり、方々に偽看板を出し、  
イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々な申せども、  
平仮名を持って「ういろう」と記せしは、親方円齊ばかり。

もしやお立会いのうちに、熱海か塔の沢へ湯治にお出でなさるか、

または伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。

お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り

破風には菊の桐のとうの御紋を御赦免あって、系図正しき薬でござる。

イヤ、最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には正身の胡椒の丸呑み、

白河夜船、さらば一粒食べかけて、その気見合いをお目にかけてみましょう。

まず、この薬をかように舌の上にのせまして、腹内へ納めますと、

イヤ、どうも言えぬは、胃、心、肺、肝がすこやかになりて、薫風喉より来たり、

口中微涼を生ずるがごとし。魚鳥、茸、麵類の食い合わせ、その他

万病速効あること神のごとし。

さて、この薬、第一の奇妙には舌のまわることが銭独楽がはだして逃げる。

ひょっと舌がまわり出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。

そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるわ、  
のんど ぜつ げ しおん ふた くちびる けいちょう  
アワヤ喉、サタラナ舌に、カ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、

かいどうさわ  
開合爽やかに、あかさたなはまやらわ、おこそとのほもよるを、

ひと ほん ほんごめ ほん  
一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆まめ、盆米、盆ごぼう

つ たで つ まめ さんしょう しょしゃざん しゃそうじょう  
摘み蓼、摘み豆、つみ山椒、書写山の社僧正

こごめ こんごめ こんごめ  
粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米のこなまがみ

しゆす しゆす おや かへえ こ かへえ  
縹子ひじゆず、縹子、しゆっちゃん、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、

おや こ おや くり き ふるきりぐち  
親かへい子かへい、子かへい親かへい、ふる栗の木の古切口。

あまがっぱ ばんがっぱ きさま かわぎやはん われ かわぎやはんは  
雨合羽か、番合羽か、貴様のきやはんは皮脚絆、我らがきやはんも皮脚絆、

ばかま みはり む  
しっかわ袴のしっぽころびを、三針はりなかにちょっと縫うて、

ぬうてちょっとぶんだせ、かわら撫子、野石竹。  
なでしこ のげきちく

によらい によらい み によらい む によらい  
のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来。

ちよつとさき こぼとけ ほそどぶ  
一寸先のお小仏におけつまづきやるな、細溝にどじよによるり。

きょう なまだら なら まながつお しごかんめ  
京の生鱈、奈良なま学鯉、ちよつと四五貫目、

ちゃた ちゃた た ちゃた  
お茶立ちよ、茶立ちよ、ちゃつと立ちよ茶立ちよ、

あおたけちやせん ちゃ た  
青竹茶筴でお茶ちゃつと立ちや。

く く なに く こうや やま こぞう  
来るは、来るは、何が来る、高野の山のおこけら小僧。

たぬきひゃっぴき はしひやくぜん てんもくひゃっばい ぼうはっぴやくほん  
狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。

ぶぐ ばぐ み あ ぶぐ ばぐ む  
武具、馬具、ぶぐ、ばぐ、三ぶぐばぐ、合わせて武具、馬具、六ぶぐばぐ。

きく くり みきくくり あ きく くり むきくくり  
菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

むぎ み あ むぎ む  
麦、ごみ、むぎ、ごみ、三むぎごみ、合わせて麦、ごみ、六むぎごみ。

なげし ながなぎなた た ながなぎなた  
あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

ごま え ごま まごま まごま  
向こうの胡麻がらは、荏の胡麻がらか、真胡麻がらか、あれこそほんの真胡麻がら。

がらびい、がらびい風車、おきゃがれこぼし、おきゃがれ小法師、

ゆんべもまたこぼして又こぼした。

たあぶぽぽ、たあぶぽぽ、ちりから、ちりから、釣つったっぽ、たっぽたっぽ一丁だこ、いっちょう

おにくにやく  
落ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬものは、

ごとく てっきゅう ぐまどうじ いしくま いしもち とらくま とら  
五徳、鉄球、かな熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎きす、

なか とうじ らしやうもん いばらきどうじ くりごんごう  
中にも、東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしゃる、

らいこう さ  
かの頼光のひざもと去らず。

ふな きんかん しいたけ さだ ごだん ぎ ぐどん こしんぼち  
鮎、きんかん、椎茸、定めて後段な、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発地。

こだな こした こおけ みそ あ こしゃくし も  
小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持って、こすくって、

こよこせ、おっと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、保土ヶ谷、戸塚は、  
がてん こころえ かわさき かながわ ほどかや とつか

はし い す さんり ふじさわ ひらつか おおいそ  
走って行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、

こいそ しゆく なな お そうてんそうそう そうしゅうおだわら  
小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原とうちんこう、

かく きせんぐんじゆ はな えど はな  
隠れござらぬ貴賤群集の、花のお江戸の花ういろう、

はな み こころ  
あれあの花を見てお心をおやわらぎやという。

うぶこ は こ いた ういろう ごひょうばん ごぞんじ もう  
産子、這う子に至るまで、この外郎の後評判、御存知ないとは申されまいまいつぶり、

つのだ ぼうだ うす きね  
角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、臼、杵、すりばち、ばちばちぐわらぐわらぐわらと、

はめ こんにち い さま あ う  
羽目をはずして今日お出でのいずれも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、

いき ひ どうほうせかい くすり もとじ やくしによらい しょうらん うやま  
息せい引っぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も照覧あれと、ほう敬って、

ういろうは、いらっしやりませぬか。